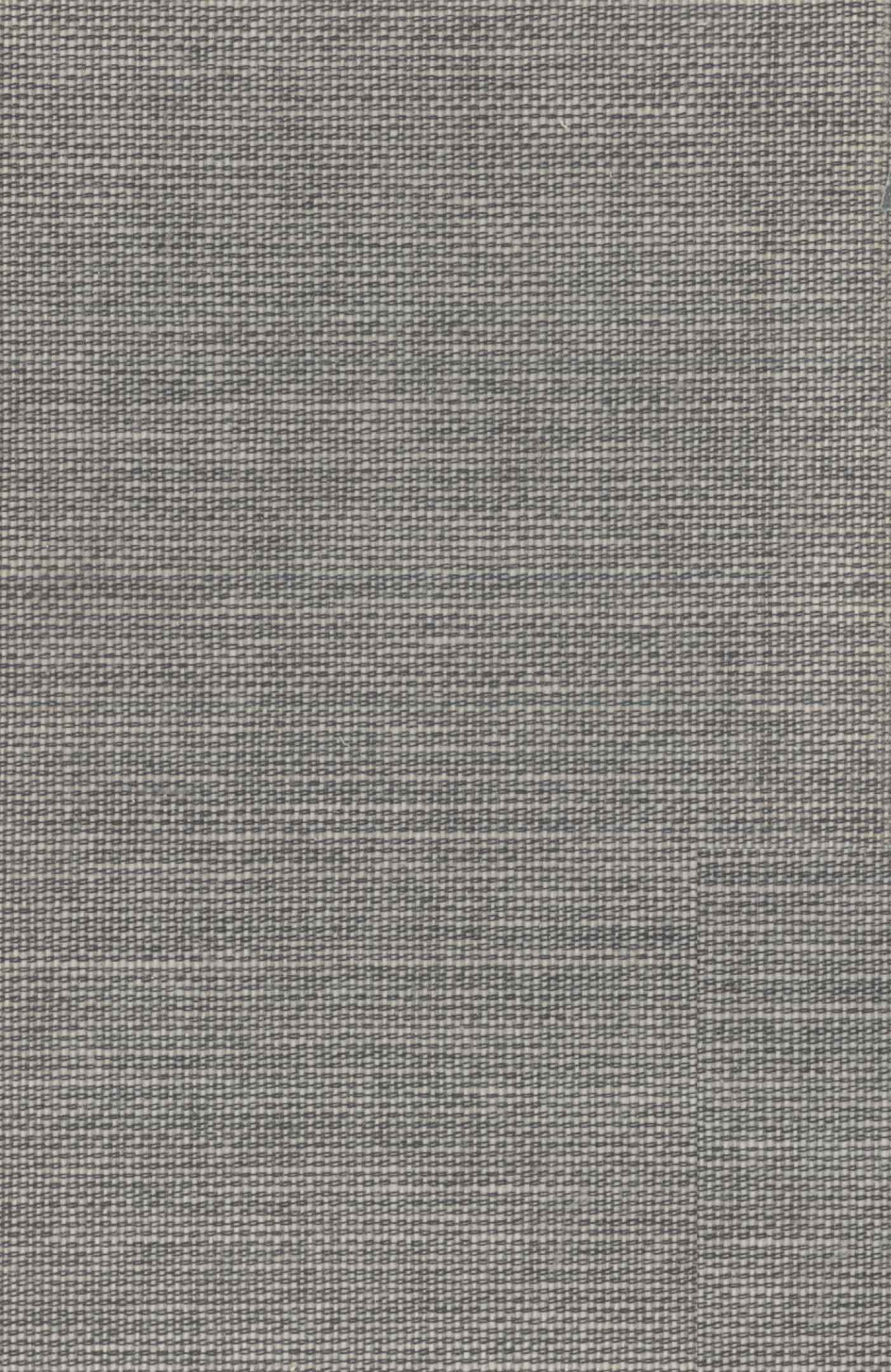




続高見順日記

十八卷

勁草書房

続 高 見 順 日 記 第八卷

1977 年 10 月 31 日 第 1 刷発行

著 者 高 見 順

発 行 者 井 村 寿 二

発 行 所 東京都文京区 振替東京5-175253 株式 勁草書房
後楽 2-23-15 電話(03)814-6861 会社

* 落丁・乱丁本はお取りかえします。

三陽社印刷・牧製本

© 1977 Jun Takami

Printed in Japan

* 定価は外函に表示してあります。

* 無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます。

0395-879800-1836

続高見順日記 第八卷 目次

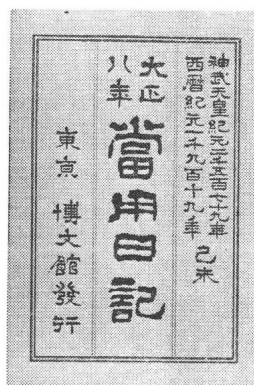
初期の日記・断章

大正八年	当用日記	1
大正十一年	スケッチブック	33
大正十二年	スケッチブック	41
大正十三年	向陵雑記	49
大正十四年	自由日記	169
昭和八年	雑記帳	307
昭和九年	当用日記	319
昭和十年	雑記帳	335
昭和十一年	当用日記	343

大正八年（一九一九年）

当用日記

（東町小学校六年、府立第一中学校一年）



高見の日記は、東町尋常小学校第二学年二組の「夏季休業中復習帖」の日誌が、残されたもののうちで最も古く（本誌省収録）、次がこの大正八年当時のものである。この「大正八年当用日記」には、各日附のはじめに「予記」という枠があり、そこには高間少年の、予記ならぬ絵が、それぞれの日のトビックスをテーマにして縦長に書き込まれている。

一月一日

僕はふと目をさました。

雨戸のすき間からははや朝の日光がさし込んで居る。飛び起きて雨戸をあけて見れば東の森からはニコ／＼顔の太陽は羊（註）未の年の春を連れて来た。今日は鳥の鳴く声もうれしそうである。大いそぎで顔を洗いおぜんに向った。雑煮からゆらくと立つ湯気はブーンとよい香がする。小さな露の玉はかど松についている。何処からともなく獅子舞の太鼓の音がひびいてくる。雑煮を祝い学校へいった。二三年の生徒は

大正八年 当用日記補遺

一月一日の日記

僕はふと目をさました。雨戸のすき間からははや朝の日光がさし込んで居る。飛び起きて雨戸をあけて見れば東の森からはニコ／＼顔の太陽は羊年の春を連れて来た。今日は鳥の鳴く声もうれしうである。大いそぎで顔を洗

おぜんに向った。雑煮からゆらくと立つ湯気はブーンとよい香がする。小さな露の玉はかど松についている。何処からともなく獅子舞の太鼓の音がひびいてくる。雑煮を祝い学校へいった。二三年の生徒は

は式をすましてぞろ／＼出て来た。「おめでと／＼

式をすましてぞろ／＼出て来た。「おめでとう／＼」と友達とあいさつをしていると太陽は雲の中へおかくれになった。間もなく式が初まった。君が代や年の初の歌をうたつて、式はすんだ。空を見あげれば絵舳や字舳がうなりを立てて飛んでいる。お菓子をいただいて家へかえった。「高間君（註Ⅱ高間は後年の筆名高見順の本姓）活動行かないか」と友達がよびに來たのでさっそく三田へ見にいった。

「ええねえさんゲブ／＼う／＼」労働者はひさしぶりの酒をうんと飲んで居酒屋からよっぱらつて來た。「私これ今日お年玉ではごいた買つてもらうのよ」「そう——私いつ買つてくれるかわからないわ」と二三人の女の子が言いあつて居る。又向う家では「ひでちゃんおいでよ、よくあがるから」と十一、二歳の男の子がひでちゃんとか言う子をよびにくると「あゝ今いくよ」と家の中から聞えて来る。「あゝはやく」「さあいこう」と武士の絵舳をもつてでてきた。「どこであげようか」「有馬（註Ⅱ旧有馬子爵邸跡の原っぱ）にしよう、さあゆこう」とかけだしてゆく子もある。皆それ／＼正月の喜びが顔にみえる。「西郷隆盛だつて」「そうかい」西郷隆盛は明治維新の際たいそう偉い人だつた。いつもにぎ／＼（^{なご}）三田の通りは今やつと起きたと見えて大きな商店の小僧さんは赤い目をこすり／＼雨戸をあけているからあたりはしんとして電車ばかりがごう／＼と線路の上をすべっている。

「あゝもうはじまつている」ブーカドンドンブーカブーカブー勇しい楽隊の音が聞える。「小人二人」「大人一人」「はい／＼」「小人三人」「はい／＼」たいへんな人気だ。内へはいると今ち／＼うど西郷さんと月照とが入水の所である。どの人もこの人も皆んな鳴かないものはない。さつまびわは実に身にしみるほどである。デブ君の選手や凸坊新画帖の床屋の巻は、おへそのやどがえと言われるほどにほんとおもしろかつた。かえつてから白酒のんで家中の人は皆真赤になつた。とこについたのが八時半。

一月二日

昨日の夜からやりだした大風は夜半から雨にかわり今朝はやんだが道がわるいので正月らしくない程しんゝとして居る。六時に起きて雑煮を祝ってから岡本（註Ⅱ高間少年に水馬^{ミヅウマ}という俳号をつけて俳句の手ほどきをしてくれた岡本癖三^{ヘクサン}）さんへ遊びに行った。「いつてまいります」と言つて家を出ると道はくちや／＼昨日の残り風はまだそよ／＼ふいている。小さな男の子はほほをまっかにして風をあげている。それにひきかえ女の子は羽^{ハネ}がつけないでこまっている。「今日は」僕は岡本さんの門をあけて女中さんにあいさつした。「おめでとうございます」「御目出度^{ごめでた}ございます」そうすると其の家の坊ちゃんが出てきた。「おゝちゃん（註Ⅱおゝちゃんは高間少年の愛称）遊びませんか おあがんさいよ」と言つたので早速内へあがつておばさんにあいさつした。「カルタ会しませんか」と僕が第一に正月の楽しみの一つをいうと「しましゅう／＼／＼」相談がまとまつたのでさあ初つた。

初めが「スミスガルタ」二番目が英語かるた 三番目は花合せ 四番目が家族合せ 五番目はお化かるたであつた。「朝野寝坊八の娘を下さい」「おわいにくさま」この家族合せが一番面白かつた。昼飯をお呼ばれした。昼からはべつにかわつた話なく夜は百人一首をする事に決めた。僕は初めてなのでとるのに困つた。九時がなつたので会をとり家へかへつた。「一年の計は元旦にあり」と古人がうたつたのを考え出し僕は一日ではなく二日に計をたてた。今日は一日くもり通しである。外では初荷の馬がうれしそうにひひんひん／＼／＼とうれしそうにいないている。日記をつけ寝たのが十一時だつた。ねむい／＼。僕はふと眠りがさめた。どうしたのだろうとあたりを見れば母も寝ている。又寝ようとふと時計を見れば一時！驚いてふとんかぶれば身体がかゆい。精神のせいかだん／＼か

ゆくなってきた。かゆくてかいくてたまらない。どういうわけだろうと考えて見ればそうそう寝るときおとそと魚をたべたその時の魚によったのだ。かゆいなーかゆいなーと声をだしたので伯母（註Ⅱ高間少年には伯母、伯父と呼ぶ親戚はないので、たまたま泊りがけで来ていた知り合いのことかと思う）さんがおきた。伯母さんかゆいかゆいと言うと、ではしずかに寝なさいと言われたがとてもねられやしない。しかしその内にねてしまった。

一月一日二日の日記はつごうにより破りましたからここ（註Ⅱ巻末の補遺のページ）に日記を書いた。故に三日からは実際の所に書きます。どうも失敬失敬くくくくくく

あばよ

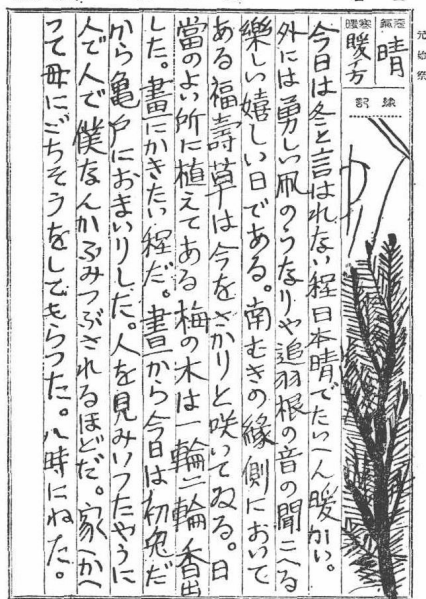
一月三日

今日は冬と言われない程日本晴でたいへん暖かい。外には勇しい風のうなりや追羽根の音の聞こえる楽しい嬉しい日である。南むきの縁側においてある福寿草は今をさかりと咲いている。日当のよい所に植えてある梅の木は一輪二輪香出した。画にかきたい程だ。昼から今日は初兔（註Ⅱ千支の卯）だから亀戸（註Ⅱ亀戸の天神様）におまいりした。人を見にいったように人で僕なんかふみつぶさ

圖表 卯

日 三 月 一

圖表 卯



（元明）朝の静島見代

れるほどだ。家へかえって母にごちそうをしてもらった。八時にねた。

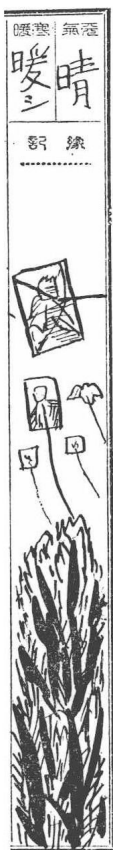
一月四日

僕は目をさまして時計を見れば八時！ そう／＼正月だと思って安心したからだ、十二時間眠^{マユ}たわけだ。御飯を食べて年始廻りをした。午後からはよその家に花合せしに行った。勝ったり負けたりしてさつと五分五分だった。七時になったので家へかえり伯父さんと湯屋へ行き、さっぱりして家にかえり、九時半に床についた。



一月五日

寒い／＼ 手水鉢には重いこと重いことたたいもわれない程の水がはっている。鏡もちにもう大きなひびが入っている。おばあさんは迷信かもしれないが今年は日和つつきだと言って居る。郵便／＼と配達人は正月だと言うのに目も廻りそうである。今日は水天宮様なのでおまいりして来た人名物の小さいまんじゅうをいただいた。まだそこには初荷の馬がひん／＼いなないている。今朝は寒^{マユ}むかったが昼からはたいへん快天気になった。湯で身を温め、八時頃にグウ／＼／＼／＼



一月六日

寒い／＼昨日より寒い。今日から寒だ。山浦さんからいただいた卵（うずら）は初めてだから嬉んで呑んだ。外には霜は一面降りて道には霜柱がたって歩く度にはカラン／＼と音がする。のに小さな子供はほほを赤くして風をあげている。向うの森はほうきをさかさにしてたてたような木が立ちならんで居る。後二日寝ればもう学校へ行かなければならぬのだ。さあこの二日をゆかいに遊ぼうと僕は思い出し岡本さんへ遊びに行った。夜は百人一首をし十一時頃に床についた。



一月七日



（註Ⅱこの日「予記」欄の下は絵のかきこみなく空白のまま）

さあもう今日一日で学校へ行かなければならぬ。氷を破り口をいすいたら歯がとれそうなほど冷くしゅんだ。朝は家にいて勉強した。又 今日でおかざりはいらないので家の松もおばあさんとおとりになった。夜は母上と一しょに山浦さんの家へ遊びに入った。家族合せをしたり花合せをしったり面白半分につい／＼おそくなった。家へかえったのは十一時？ あしたは学校へゆかなければならぬのだと思うと気が気でないのでさっそく床へもぐった。

一月八日



びゅー／＼と寒い寒い身をきるような北風は砂を吹きまくって往来を荒れ廻っている。嬉しいことがたつていると見え七時に起きることができた。はやく御飯を食べ学校へいって見ると誰も来ではない？ 速いのかしらと時計を見れば九時二十分？ どうしたのだろう。まだ寒いからなまけてこないのだろう？ 僕は家へかえり火にあたってまたいった。式をすまし露月町の金光教会へおまいりした。帰りに母がころんだ。八時頃に床についた。

一月九日



朝起きて庭へ下ればやせおとろえた雀はちゅう／＼悲しそうな声で餌をあさっている。ガー／＼と電車の走る音が風の音とまじってきこえる。学校の用意をして行った。嬉しい？ 僕はこの三学期の副級長になったのだ。あの縁の所に立って号令を級長（中西）がかけると僕が列を整えるのだ。嬉しいな？ そしてあの緑色のひもが僕の肩にかけられるのだ。嬉しい日嬉しい日。夜は儘君と湯屋へ行き、御ちそうを食べグウ／＼／＼／＼

一月十日

朝起きて見ると薄暗い。おや時計を見れば八時 おや／＼ いつも八時といえはあかるいのだ。ふしぎに思つて障紙をあければ雨がふつて居て空にはまだのこりの雲がある。何んだ／＼ 雨ふりか何んだ／＼ 学校は九時はじまりだが、余りはやくはないので大急ぎで御飯をすまし学校へいった。家遊びなのだが／＼とうるさい。又僕は中学へあがるから毎日、授業がすんでから補習をするのである。今日も麻中の試験問題をやって100である。

一月十一日

今日もまだし／＼と雨がふっている。学校へ行くのにてまがかゝる。あととはふだんとかわりなく過した。又補習の時計表をたてた。四時半頃学校からかえり五時まで読算をやり御飯を食べてから日記をつけ、それから又算術の復習をしてねるときめた。但し読方は一日一課ときめ算術は一つ学校の



習二十問

日十月一

庚午 臘月

朝起きて見ると薄暗い。おや時計を見れば八時おや／＼いつも八時といえはあかるいのだ。ふしぎに思つて障紙をあければ雨がふつて居て空にはまだのこりの雲がある。何んだ／＼ 雨ふりか何んだ／＼ 学校は九時はじまりだが、余りはやくはないので大急ぎで御飯をすまし学校へいった。家遊びなのだが／＼とうるさい。又僕は中学へあがるから毎日授業がすんでから補習をするのである。今日も麻中の試験問題をやって100である。

試験問題か、普通算術を五題するとした。三日坊主の僕だがどうかうまくゆけばいいが。今日この時間表通りにして十一時にグウ／＼

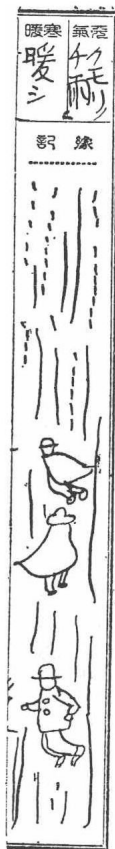
一月十二日

朝八時に起きた。はたから八時に起きるというとおかしい様だけれども昨夜は十一時にねたの差引そんなにおかしい方ではない。今日日曜であるが一日学校へいった。朝は補習をし、昼からは手伝（先生の）いをした。又大正三年の今日桜島が大噴火した。其の時のようすはきけば、真赤の熔岩が水蒸気と共にふきて見てもおそろしい有様を表し、火山灰は九州四国山陽山陰までも降りちったという。なんとおそろしいではないか。九時にねた。



一月十三日

学校で第一時間に読方の苦楽を習った。「疏食をくらい、水を飲み脰を曲げて之枕とするも楽み亦其の中に在り、不義にして富み且貴きは我に於て浮雪の如し」と孔子がいったが実に貧賤な人も行が正しければ楽しく、又自由であるが富貴な人でも省みてやましい所ある者は苦が多く楽はすくない。三時半頃からぼつりぼつりと大粒の雨がふり出した。又開成中学の試験をやって先生から及第とかい



てくださった。夜は風が出た。

一月十四日

昨夜十一時にねたので今日もおそく起きた。中学試験のことが思いだされて一心に勉強した。開成中学の試験をやったら二つもちがうんだもの。うか／＼したら落第だ。今日は十四日から三田の地藏尊のおえん日^{ツマ}だったので、本を買いにいった。寒風がふき下ろしてきて耳も取れそうに寒いのに、商人は「はい三十五銭にしておこう」など景気をつけている。角力の勝負を表してある所は人の山が築かれている。又、作文を習うために作文模範答案集をかえりに買った。



一月十五日

朝十五日のおしるこをたべた。僕はあまいものがきらいなので食べるのに困った。国語時間にコロンブスの南亜米利加発見を習った。人間には実にはんたいが必要である。コロンブスはにんたいが強かった為あのような成功を見たのであるとおっしゃった先生の言葉（註＝身）にしてみた。この晩、ちようど家に裁縫を習いにきている橋本生子という人があるが生れつき、あまり頭がよくないので叱られている。「すみません／＼」とあやまっていた、あゝ、此の人も自分のあたまがわるいためだ。



一月十六日

今日で寒角力の真最中なので、学校ではほれ大錦が大敗だとか、誰々は全勝とかさわいでいる。又今日は十五日からまって居たおえん様(おんさま)だったので、当番などはおそくなるとおまいりする(註||事)が出来ないのでしゅくく掃除している。僕は補習しておそくなったので晩に母と一しょにおまいりした。ジャンボンくくく物すごい太鼓の音の中にお経の音が聞える。死んだならあの恐いおえんま様の前に出なければならぬのだ。夜九時半にねた。



一月十七日

七時半頃ふと目をさました。「寒いく」と裏口の方で聞える。ままよもうすこしと狸寝をしていて八時頃はい出た。机の上にはすずりと日記帳と「ソウであります物語」という本とが整頓よく並べられている。そうくこの本は昨日買って貰った面白い本だと開けて見れば、おへそが宙返りしそうにこっけいだ。「従卒の涙」なんかは其の最上だ。それこれしている内に八時をうったので大いそぎで学校へ行った。何事もなくすまして帰り、復習して湯屋へ行き温まってかえった。

